

社会参加型ボランティア事業としての ホンモロコ養殖と琵琶湖放流活動

NPO 法人 グローバルヒューマン

代表 高橋 英夫

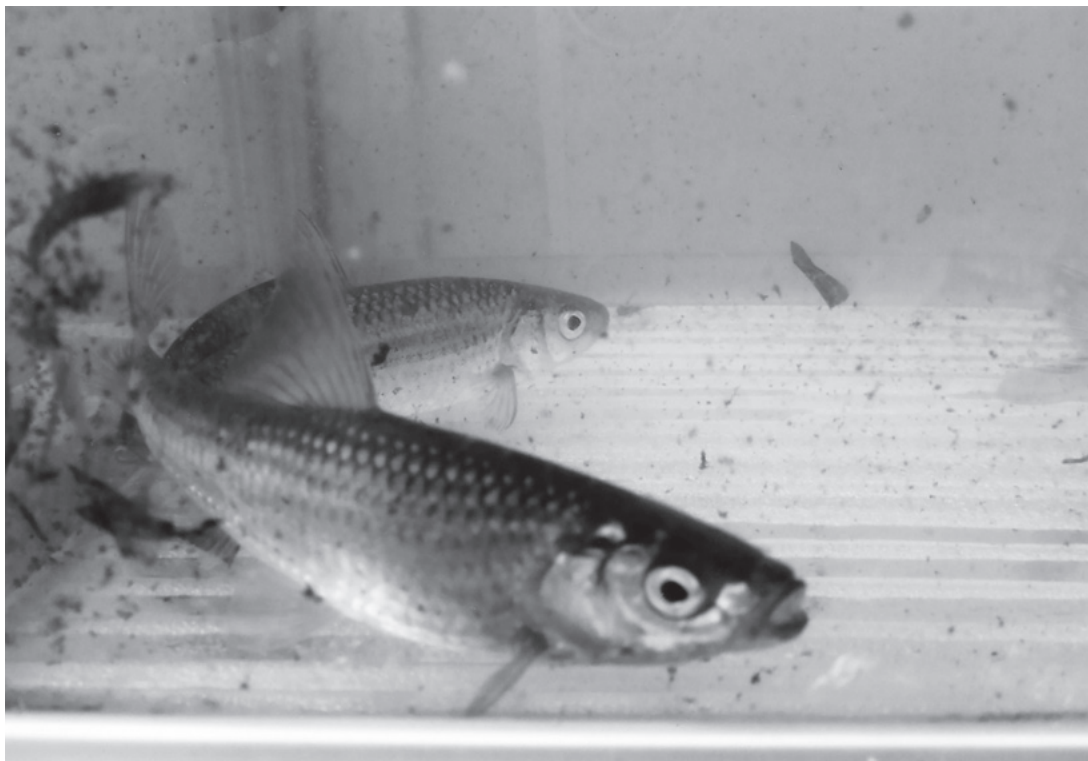
滋賀県

第 1 本活動を必要とする社会的背景と現状

1. 琵琶湖固有種ホンモロコは、1974 年 372 トンの捕獲高をピークに、ブラックバス・ブルーギルなどの外来種による捕食、琵琶湖岸コンクリート化によるヨシ原の減少、圃場整備による産卵魚道の切断、産卵田への進入路の遮断、山林の荒廃などにより、捕獲高は 30 年間で 60 分の 1、僅か 6 トンに激減した。

現在はその生態系すら危ぶまれ、環境庁レッドデータブック絶滅危惧種 1 類に指定され、今や 100 グラム 300 円で卸売りされる高級川魚となった。

他方、淡水魚の代名詞マゴイは平成 16 年琵琶湖に飛び火したコイヘルペスウイルス病 (KHV) により生産額が激減、平成 18 年の生産高は滋賀県全



①琵琶湖固有種 ホンモロコ

体で僅か 300 万円まで落ち込んでいる。

加えて、琵琶湖の鮎寿司で有名なニゴロブナは環境庁レッドデータブック「絶滅危惧種 1B 類」に指定、ビワマスは環境庁レッドデータブック準絶滅危惧種に指定、ビワコオオナマズは滋賀県レッドデータブック準絶滅危惧種に指定されるという、ほぼ全滅状態で、余りにも多くの琵琶湖固有種が絶滅危機に瀕し、人為的な養殖・放流活動を行って早急に琵琶湖の生態系を回復・保全する必要に迫られている。

2. かつての関西圏は、琵琶湖を中心として京都、三重、金沢、岐阜地方に淡水魚食文化が根強く定着し、日々、淡水魚をこよなく愛し、食する豊かな生活文化があった。

又、今も琵琶湖周辺には伝統の川魚甘露煮炊き技法業者が存在するが、彼らは心ならずも中国産輸入淡水魚を炊き、細々とその営みを続けているのが



②ホンモロコの甘露煮

現状で、このままでは淡水魚食文化と共に川魚甘露煮炊き伝統技法すら消滅してしまう運命に直面している。

よって、淡水魚食文化を現在に蘇らせ、若い世代の人達に対しても、日本の郷土に育った柔らかくて優しい本物の淡水魚の味を是非知って貰い、次世代へ継承して行く必要がある。

3. 地方の疲弊、過疎化、少子化、農業の不採算性などから、滋賀県下では、農家数 31,300 戸の 30% にも当る 9,100 戸が、「何も作らなかった」、「何も作れなかった」状態が継続している。日本のコメ作付け全面積 160 万 ha に対し、国は減反実施面積を公表しないが、国内水田の 40% に当たる 100 万 ha が対象田と言われる。

長期間放置され、原野化した耕作放棄地・休耕田は全国で 38 万 6 千 ha。その中で現状そのままでは耕作に使えない農地が 28 万 4 千 ha。更に森林原野化が進み復元が困難になった田が全国で 13 万 5 千 ha、琵琶湖周辺市町村



③ 荒廃の一途を辿る耕作放棄地

だけでも 2,600ha もあり、限界集落・準限界集落化による地方の崩壊が加速度的に進んでいる。

このまま荒廃化・拡大化の一途を辿る耕作放棄地・休耕田を放置すれば、大半が農地として回復不能に陥るのは必至で、早急な有効利用策を講じる必要に迫られている。

4. 地方の疲弊に歯止めを掛け、過疎集落に若い人々を呼び戻し、活性化するには、地方の村落に新たな収益事業を根付かせ、収入の確保、魅力ある経済的生活基盤の確立を図らなければ地方の再生も自然との共生も絶対ない。

幸いにも、ホンモロコの養殖技術は既に確立され、粗放的で女性や高齢者でも十分対応できる。池沼は勿論のこと、耕作放棄地・休耕田を 30～50cm 程度築池すれば養殖が可能となる。稲作のように大型機械導入による多額の資金投下など全く不要で、成魚は 100 グラム当たり卸値 300 円、琵琶湖周辺の煮炊き屋さんで甘露煮製品にすれば 100 グラム 1,200 円で小売可能である。



④耕作放棄地を養殖田に改田

5. 琵琶湖周辺の市町村のいずれも、林業不振、間伐放棄で針葉樹人工林は荒廃の一途を辿る。保水力を失った山の下床は日も射さず、下草も生えない。雨水は地表を洗い、赤土汚染により磯枯れした河川や湖沼。琵琶湖の原風景を構成する山並みは、かつて有していた治水・治山・涵養機能を急速な勢いで喪失している。

当然、荒廃化した山は渇水や洪水による甚大な被害を多発させ、下流住民の生活や生産活動、漁業者の漁獲高、経済生活基盤維持に重大な困難を与えている。即ち、日本と琵琶湖の原風景回復が急務となっている。

6. 平成19年1月の厚生労働省の調査、並びに同年6月に当NPO法人ら「虹の全国連合」により実施した「もうひとつの全国ホームレス調査」で現認されたホームレスだけで18,500名。

この外、ニート・ネットカフェ難民と呼ばれる数十万人の人達に加え、日々拡大する社会的絶対格差、100年に一度と言われる世界的規模での金融危機



⑤琵琶湖の原風景を構成する山並みが崩壊



⑥新たな就労の場の創造



⑦元ホームレスと呼ばれた人達が活躍

と景気後退、企業倒産、解雇、派遣止めなどにより、企業・職場・家庭・地域から弾きだされた派遣切り・ホームレス予備軍と呼ばれる大量の人々が世に溢れ、生命の危機に怯えている重い現実がある。

7. 故事に曰く「魚を与えて一日を養い、漁を教えて一生を養う」との名言がある。ホームレス・同予備軍に短期的な生活保護費（全国で135万人もの人達が生活保護を受けている）を与えるは、今日一日を考える施策でしかない。

彼らが直面する諸問題はすなわち我々自身の問題と携え、彼らに親身になって向き合い、共に解決に当たり、可能な就労先を見出し、或いは新たな雇用機会を積極的に創造し、自立生活・社会復帰を早期に実現して貰う必要に迫られているのである。

第2 活動の内容と成果

1. かつてはホームレス・ニート・ネットカフェ難民・派遣切りと呼ばれた人達



⑧ホンモロコの産卵

2008年(平成20年)4月1日(火)

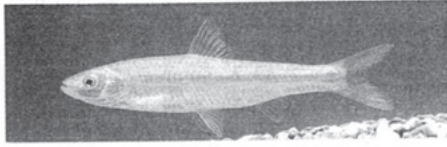
人生の夢もう一度

大津市の元ホームレスの男性たちが、絶滅が危ぶまれる琵琶湖の固有種ホンモロコの養殖事業に取り組んでいる。ホームレスの社会復帰を支援するNPOが滋賀県高島市の漁協に打診し、人手不足で使われなくなった養殖池で先月から始めた。事業名は「再チャレンジ夢工房」。人生の再スタートを伝統の湖魚復活にかけている。

滋賀 元ホームレスが 伝統の湖魚復活



④高橋英夫理事長（左から3番目）や漁協関係者とホンモロコの養殖池を見学する元ホームレスの人たち＝滋賀県高島市マキノ町海津で3月23日、豊田将志撮影⑤琵琶湖固有種でコイ科の淡水魚のホンモロコ（滋賀県立琵琶湖博物館提供）



長が高島市マキノ町在住で、地元の海津漁協に相談。20〜60代の男性6人が週2、3回、大津市にこのNPOが所有するマンションから、安価格で養殖池を貸し、水質管理や給餌、出荷などを指導。約半年、ホンモロコは体長約10センチ、琵琶湖の天然物魚の淡水魚で体長約10センチ。琵琶湖の天然物魚の淡水魚で体長約10センチ。琵琶湖の天然物魚の淡水魚で体長約10センチ。

「琵琶湖の漁業全体が衰退する中で結構な取り組み」と激励。サイビス業の仕事を失い、路上生活をしていた同町出身の男性(62)は4年ぶりに帰郷し、両親とも再会した。「郷里で、こんな仕事ができるなんて夢のよう。迷惑をかけた父母に私が育てたホンモロコを味わってもらおう」と話している。

【豊田将志】

ら通い、高島市にある約20年前から未使用の養殖池6面で草刈りや清掃をしている。漁協が年5万円の格から年かけて稚魚5万匹を育て、販売を目指す。体長5センチ未満の魚は琵琶湖に放流し、繁殖に期待する。ホンモロコはコイ科の淡水魚で体長約10センチ。琵琶湖の天然物魚の淡水魚で体長約10センチ。琵琶湖の天然物魚の淡水魚で体長約10センチ。

⑨新聞記事

の社会復帰支援事業に並行して、現在運営中の第1次ホンモロコ養殖原田・池からホンモロコ、マゴイを採卵・孵化できた。

2. 耕作放棄地を新たに築池した第2次モデル養殖田で、孵化したホンモロコ、マゴイを育養できた。
3. 給餌により6cm以上となったホンモロコの内、半数を販売して作業員の報償金に充当できた。
4. 6cm未満のホンモロコ全量、並びに6cm以上のホンモロコ残量を琵琶湖へ放流し、琵琶湖の生態系回復保全に寄与できた。
5. 元ホームレス・ニート・ネットカフェ難民・派遣切りと呼ばれた人達を育成し、地域で期待される養殖技術者・地域活性化要員として、育成できた。



⑩ホンモロコの収穫

6. 「再チャレンジ夢工房」を Key Word に、当 NPO 法人、海津漁業協同組合、滋賀県漁業協同組合、地元団体・住民、ホームレス全国支援ネットワークの連絡協議会を定期開催する条件が揃った。



⑪ ホンモロコを琵琶湖へ放流

「場所とやる気あれば」元ホームレスら養殖



紙コップに入れたホンモロコを琵琶湖岸から放流する子どもたち
—高島市マキノ町海津で

育ったホンモロコ放流

マキノ東小の児童を招きイベント

高島 路上生活を経験した人々が今春、高島市内で始めた琵琶湖の固有種ホンモロコの養殖事業が無事成功を収め、同市マキノ町海津で地元の小學生を招いた放流イベントが23日、行われた。初年度の取り組みとしては「合格点」といい、関係者には喜びと安堵の笑顔が広がっていた。

【豊田将志】

ホームレス支援を手がける京都府南丹市のNPO法人「グローバルヒューマン」(高橋英夫理事長)が「再チャレンジ夢工房」と名付けて始めた事業。元の海津漁協から格安で借りた養殖池や休耕地を利用し、約6万匹の稚魚を育てた。同工房の所長も務める岩上正弘さん(61)ら漁協組合員の漁師の助言を受けながら、大津市内の20〜60代の元ホームレス約50人を招き、育つ

た43匹のうち一部を放流。勢い良く跳ねる小魚に子どもたちは大喜びで、「大きくなれよ」などと声をかけ、湖畔から放した。呉服店の経営行き詰まりなどから、過去に路上生活を余儀なくされたという坪倉隆男さん(62)は「地域の方々のおかげでここまで来られた。皆さんの力があって、今の私たちがいられる」と感謝の気持ちを語り、別の男性(52)は「毎週通って世話をしてきた分、達成感を感じています。ま

ともな生活を送るために、決してあきらめない」と社会復帰への強い意欲を語った。事業は来年度以降も継続を決めており、既に休耕田10カ所を追加購入。高橋理事長は「場所と技術があり、やる気があれば誰でもできることが示せた。来年は彼らに事業を主導してもらい、将来は地域活性化を手がける人材になってほしい」と期待を語った。

⑫新聞記事



⑬再チャレンジ夢工房

第3 今後の課題と展開

1. 海津漁業協同組合、滋賀県漁業協同組合連合会、地域村落、地元住民、学者・専門家シンクタンク、ホームレス全国ネットワークらとの協働プロジェクト事業を更に深めることにより、現在育養中のホンモロコ・マゴイ・フナに限らず、採卵・孵化・養殖・半数販売・半数放流の対象を、環境庁レッドデータブック記載のニゴロブナ、ビワマス、ビワコオオナマス、ビワコドジョウ、ビワコシジミなどに拡大することが既に当NPO法人の新たな目標となっている。
2. 本プロジェクトの特徴のひとつは、「耕作放棄地を養殖田にすること」は、「いつでも田んぼに戻せること」を大前提にしていることである。ホンモロコ養殖田の水深は僅か30～50cmで良いこと、田んぼの形状を変えずに養殖田築池が可能なことである。

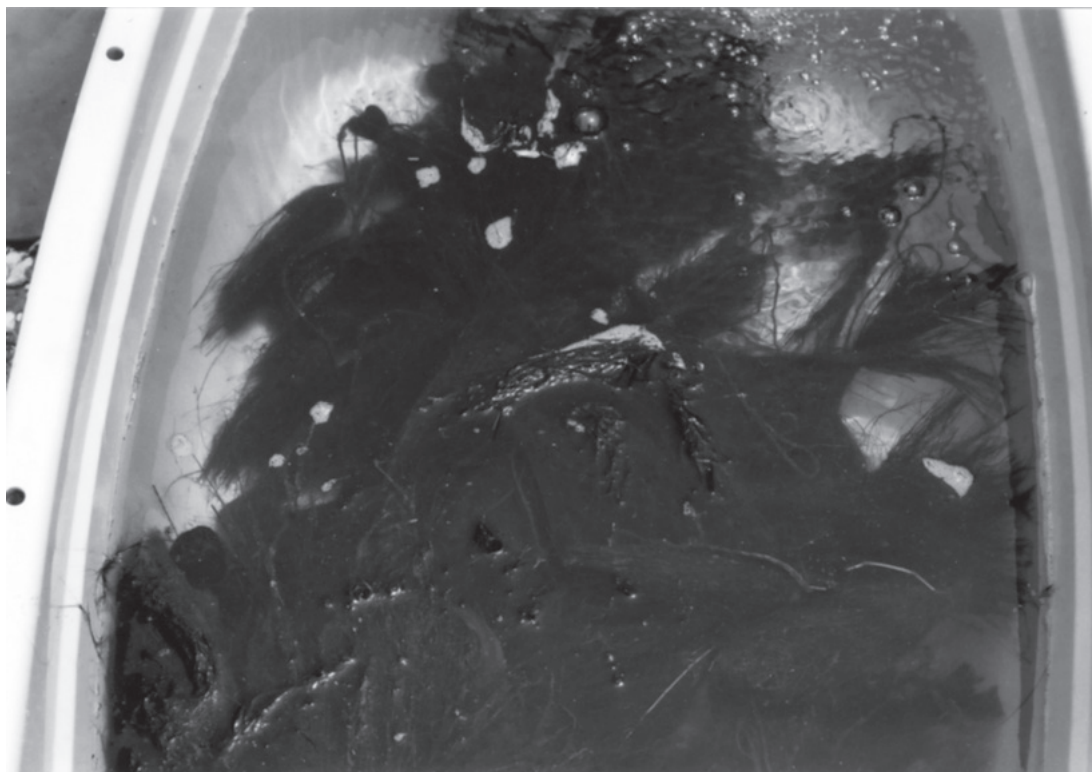
将来、日本の農政が改善し、食の安全・安心を確保するため、或いは国の

食の自給率を上げるための施策が有効裡に作動し、日本の零細農家が稲作を収益事業として再び耕作できる日が来た時、いつでも、誰でも、容易に稲作に復帰できることを想定した養殖田造りを行っている。

勿論、生態系が再生・保全された時も然りである。

3. 本プロジェクトのもうひとつの特徴は、地域住民・地域団体との拘わりと広がりである。地元住民は耕作放棄地・休耕田・空き家を提供、多くの人々が頻繁に本プロジェクトに助言を与え、手持ちの作業用具や備品を無償提供、或いは作業を直接手伝い、地元小学校と多数の児童・父兄が放流会に参加、みんなで炊き出しを楽しみ、琵琶湖固有種絶滅危機からの脱出と生態系の回復保全、将来の地域活性化に期待を寄せていることである。

絶滅危機にある琵琶湖固有種が早期に環境庁レッドデータブック記載から外れ、自然と人間の共生と漁業の営みが確保され、全国に淡水魚食文化が復活する基盤ができ、琵琶湖と共に生活してきた人間の長い歴史、自然の恵



⑭採卵・養殖の対象を拡大

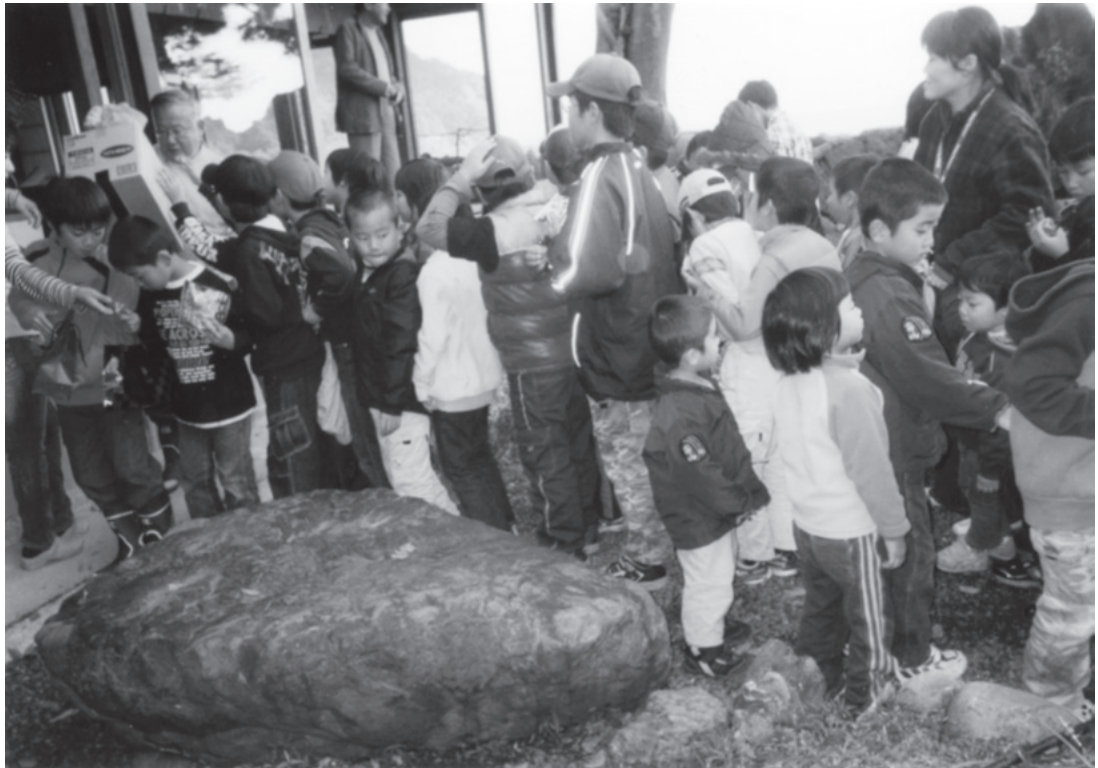
みを楽しむ幸せを実感する地域全体活動が始まったばかりである。

4. 地方の崩壊に歯止めを掛けるため、当 NPO 法人、並びに漁業協同組合、同連合会、学者・専門家チームが積極的に全国行脚して、各種仔稚魚の無償提供と養殖技術指導を実施する財政的基盤を構築する必要がある。

以上



⑯地域との交流



⑰地域の子供達も参加

